

平成30年度 第2回「島根県社会教育委員の会」会議における発言骨子

日時：平成31年3月8日（金）13:30～16:00

場所：島根県民会館 303会議室

**吉田SL** 平成30年度第2回島根県社会教育委員の会議を始める。島根県教育委員会教育長が御挨拶する。

**新田教育長** 今年度2回目となる島根県社会教育委員の会議に御出席いただき、感謝。今年度、既に幼稚園で新指導要領が実施されており、小学校、中学校では完全実施に向けた移行期間中である。来年度は高等学校においても移行期間が始まる。新しい学習指導要領のキーワードの一つに、「社会に開かれた教育課程」がある。これは、学校と社会とが協働し、よりよい学校教育を通して、よりよい社会をつくるという理念のもとに、社会に開かれた教育課程を実現しようとするものである。本県では、先月、「県立高校魅力化ビジョン」を策定した。2020年代の県立高校における教育の基本的な方向性と、今後5年間の具体的な取組を整備をしたもの。本県では、これまでも地域と連携・協働しながら、「教育の魅力化」に取り組んできた。本県が目指す「教育の魅力化」とは、「島根で育つ一人一人の子供たちが、みずからの人生と地域や社会の未来を切り開く、そのために必要となる生きる力を育ていく。そのためには学校と地域社会がその目標を共有して協働を図りながら、島根の教育をよりよいものに高めていく。」ことを、このビジョンの中でも整理した。新学習指導要領が目指している学びの姿は、本県が目指している「教育の魅力化」と方向性を同じくするものであると考えている。こうした子供たちに向けた取組と、魅力のある地域づくりの取組との好循環を生み出していくという視点が重要であると考えている。社会教育における「学びを通じた人づくり」、「地域づくりを担う人づくり」を推進している県の社会教育は今後より一層重要なものになっていく。変化の早い社会の動きや、多様で複雑な地域課題の解決に向けて、今後ともお力添えをお願いしたい。本日は、忌憚のない御意見をいただき、今後の社会教育のあり方をより明らかにしてまいりたい。

**吉田SL** 教育長は他の公務のため退席する。本日の会議の進行は、協議・説明、情報提供の後、意見交換という順でお願いしたい。ここからの議事は、有馬会長に進行役をお願いする。

**有馬会長** 議事として、（1）協議・説明、（2）情報提供、（3）意見交換がある。意見交換では、「教育の魅力化」を通して「学校や地域の特色を生かし、地域の魅力をどう

高めていくか。」について意見を出していただきたい。まず、協議・説明の①、②、③について説明をお願いしたい。

**森脇社会教育主事** 平成31年度の「公民館を核とした持続可能な地域づくり推進事業」について説明する。地域の拠点である公民館機能強化、活動の充実を支援するため、来年度4つの事業を行う。1つ目の「地域課題解決型公民館支援事業」は、A型の「小さな拠点づくりの取組を加速させる人づくり」、A'型の「都市型の課題解決へ向かう取組を加速させる人づくり」、B型の「地域課題解決型の取組」を行う公民館を支援する。2つ目の「ふるさと体験活動公民館支援事業」は、事業を終了する。「公民館はじめの一步支援事業」は、来年度も行う。3つ目の「公民館ふるさと教育推進事業」はリニューアルする。これまで中学校単位で行ってきたが、来年度からは公民館単位で行ってもらおう。4つ目の「公民館ふるまい推進事業」も、来年度も行う。

**三島S L** 平成31年度「県社会教育研修センター事業」の説明をする。「社会教育に携わる方向けの対象者別の研修」では、10月3日に「社会教育委員研修」を大田市で開催する予定。「全体研修」では、「しまねの社会教育基礎講座」や「しまねの社会教育フォーラム2019」を行う予定。続いて、平成31年度の各種表彰の説明をする。文部科学大臣表彰の「社会教育功労者表彰」、島根県知事の「島根県各種功労者表彰」の社会教育分野、県教育委員会の「教育功労者表彰及び教育優良団体表彰」の社会教育分野である。地域で御活躍の方について、地域で御活躍の委員の皆様から情報提供いただきたい。

**有馬会長** 県の社会教育委員としても、県の社会教育課を中心とした県教育委員会がどういった事業やどういった施策を行っているかについて理解しておく必要がある。

事業説明について、御質問、御意見をお願いしたい。

**豊田委員** 公民館支援事業について、リニューアルの理由や背景を教えてください。

**森脇社会教育主事** リニューアルした「地域課題解決型公民館支援事業」については、A型とA'型がある。A型は、これまで地域課題解決型に取り組んだり、同様の活動によりつながりをつくってきたりしてきた地域が、さらに充実した活動にステップアップしていくものである。県の主要施策である「小さな拠点づくり」につながるような取組をA型、「小さな拠点づくり」の対象エリア外の都市部の取組をA'型と設定した。また、「公民館ふるさと教育推進事業」は、これまでの3年間で全中学校区で取り組んできたが、各公民館が地域に合ったやり方でより効果的・実践的に活動を進めてもらいたいという考え方で、公民館単位で取り組んでもらえるようにリニューアルした。

**豊田委員** 社会教育課が担当している事業のうち、教育委員会のほかの部署と協働しながら実施している事業はあるか。

**三島S L** 特徴的なのは、「ふるさと教育」。社会教育課が予算を持っているが、学校で使われることなので、学校と社会教育課と教育指導課とが一緒になって行っている。また公民館関係では、社会教育課が所管しているが、「小さな拠点づくり」等、教育委員会以外の首長部局と連携しながら進めている。

**豊田委員** 学校を開くことや、学校を含む地域教育の境界線がなくなっていくことは、行政も同様であるべきだと思っている。現代の社会課題が結構複雑であるため、各部署で課題解決に当たったり、事業を組んだりするというより、各課横断で事業を組んでいくほうがよいと思つての質問だったが、実際は既に行われていることがわかった。

**有馬会長** 行政組織では、例えば教育委員会の中に社会教育課や教育指導課、学校企画課等がある。また、地域課題解決型や小さな拠点づくり等の言葉も、どちらかというとき知事部局側から出てきた言葉である。縦割りが進むことにより横の連携が薄くなることは警戒しなければならない。横の連携や組織の連携ということは重要な視点だと思うので、今後も念頭に置いて考えていきたい。

**森脇社会教育主事** 「島根県公民館研究集会」について情報提供する。2月11日に浜田市三隅町を会場にして研修会を開催した。今年度の「地域課題解決型公民館支援事業」に取り組んだ30の公民館全てが分科会で実践発表を行った。スタッフを含めて約500人の参加があった。どの分科会でも非常に活発な意見交換が行われた。

**三島S L** 「しまねの社会教育フォーラム2018」について情報提供する。2年前まで「結集！しまねの子育て協働プロジェクト」コーディネーター研修を兼ねた研修会を行っていたが、フェスティバル的な要素が強いものだった。1年間の検討期間を経て、実践者のスキルをさらに上げることをコンセプトに本フォーラムを開催した。社会教育関係者が真剣に協議することを目指して行ったが、非常にシビアなよい研修ができたにとらえている。来年度も社会教育に携わる方のスキルを高めたいと考え、計画中。

**有馬会長** 以上のことについて、質問や意見があればお願いしたい。

**岡本委員** 浜田市の三隅中央会館と三隅中学校を利用して島根県公民館研究集会を行った。浜田市には県民会館のような大きな施設がないため、学校の各教室を会場に30個の発表を行った。500人近い参加者が聞きたい発表を選び、意見交換を行うという、非常に実りのある研究集会になった。社会教育を進める大きな力になる大会だった。

**有馬会長** ここから意見交換に入るのに当たり、まず最初に意見交換の進め方等について事務局から提案いただく。

**三島S L** 島根県教育委員会では「県立高校魅力化ビジョン」を2月に策定した。本県における高校魅力化とは、「みずからの人生と地域や社会の未来を切り開くために必要となる生きる力を育むことを目指した、地域社会との協働による魅力ある高校づくり」のことである。これは新学習指導要領の目指す、社会に開かれた教育課程と方向性を同じくするとともに、この取組を進めていくことは地域の魅力化にもつながると考えている。

本日は、「若い世代が学びたい、行きたい、子供を育てたい。」と思う魅力ある地域づくりについて協議していただきたい。意見交換の前に、「教育の魅力化」とそれにかかわる地域での取組などについて教育指導課と社会教育課から説明する。その後、「高校をはじめとした学校や地域の特色を生かした地域の魅力をどう高めていくのか」ということを御協議いただきたい。

**有馬会長** 議論に入る前に、教育指導課から後藤社会教育主事、社会教育課から吉田社会教育主事に説明や事例紹介をお願いしたい。

**後藤社会教育主事** この会議は社会教育課が主管をしているが、私は教育指導課という学校教育を所管するセクションにいる社会教育主事。きょうは、2つのことを説明したい。

1つは先ほど申し上げたように、「教育の魅力化と社会に開かれた教育課程」。「社会に開かれた教育課程」を踏まえて、「教育の魅力化」の取組が今どのように進んでいるのかを、私と吉田サブリーダーが説明する。「教育の魅力化」の考え方を示したものは幾つかあるが、整理のためにもう少し時代をさかのぼりたい。鴨木前教育長の教育長メッセージの中の「主体的に課題を見つけ、さまざまな他者と協働しながら、定まった答えのない課題にも粘り強く向かっていく力を育む取組」が「教育の魅力化」の取組であると私たちは考えている。

教育長メッセージと時を同じくして同じようなメッセージが出ている。学習指導要領前文に、これからの子供たちに必要な力は「多様な人々と協働しながらさまざまな社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会のつくり手となることができるようにすること」である、と。両者の表現の仕方は若干異なる点もあるが、1人ではなく様々な人と協働しながら、変化の大きい社会を乗り越えていく、持続可能な社会のつくり手となるような力をつくっていききたいということは共通している。島根県が求めている力と、国が求めている力は方向性を同じくしており、日本の社会が子供たちに求めていると

いうことを御認識いただきたい。教育長メッセージにも、学習指導要領前文にも続きがある。教育長メッセージには「学校教育が地域社会に開かれ、地域社会と連携・協働する中で、子供の力を伸ばしていく存在にならなくてはならない。」と述べられている。また、学習指導要領前文の中にも、「よりよい学校教育を通してよりよい社会をつくるという理念を学校と社会で共有する。」ことが述べられている。このように、国も島根県も同じような課題を持って、同じような解決策を1年ぐらい前に提示していた。

学力調査結果が大変話題になり、もっと学力を上げないといけないのではないかという指摘をたくさん受けている。もちろん、大事だと思っているし、そのような取組も必要だと思っている。だが、それだけでいいのか。アメリカのオックスフォード大学のマイケル・オズボーンという学者によると、労働者の仕事の47%は自動化されると提唱されている。AIが発達し、これまでの働き方とは違う働き方がこれからの社会に訪れる。また、文部科学大臣補佐官の鈴木寛さんは、これからは単純な社会ではなく、様々な場面で板挟みや想定外の出来事が多く発生し、それらに対応できる力をつけていかななくてはならないということをおっしゃっている。ほんの数年間で社会構造が大きく変わってきている実感を皆さんもお持ちだと思う。AIが発達した社会、またより難解で複雑な課題に向かうために、島根県も国も課題に粘り強く向かっていけたり、困難を乗り越えていけたりする力をつけていかななくてはならない。だからこそ教育課程を社会に開き、諸課題を1人ではなく協働しながら解決する力をつけていく必要があると考えている。

ところが、島根県で上記のことを公民館の職員さん方に話すと、「もう何十年も前から学校と地域が連携した子供たちの取組を行っているから、島根県は大丈夫。」とよく言われる。確かに、相当なアドバンテージが島根にはある。しかし、「社会に開かれた教育課程」の方法論がそれぞれの現場の中でできているのかということは、検証しなければならないと思う。

また、島根県の担当者が各市町村や高校と一緒にあって教育の魅力化に取り組んでいく伴走という仕組みをつくっており、私は飯南町の伴走である。飯南町は保・小・中・高の連携に以前から取り組んでいる。例えば、ひと・もの・ことを有効に活用した「ふるさと教育」や「ふるさとシンポジウム」という小学生、中学生、高校生が一堂に会したふるさと教育の発表会を行っている。各学校の学習成果の発表や町政に対して提案をする場となっている。さらに「町ぐるみの職場体験活動」は、2つの中学校が連携し、町の担当部局と一緒にあって職場を探して、職場体験を行う取組等を大変熱心の実施している。魅力化

を推進する中心となっている組織が飯南高校魅力化協議会。今年になり高校魅力化の組織ではなくて、飯南町全体の魅力化を推進する飯南町魅力化協議会という組織に比べをして、昨年から「子ども未来会議」という会議を立ち上げている。飯南町は5,000人の人口規模だが、1割の町民が集まれば町が動くというキャッチフレーズで、町民の方を集めて飯南町の子供たちの未来を語り合う会議を実施をしている。実際には小学生から高齢者までの町民300人が参加し、大変な熱気で盛り上がっていた。初年度は飯南町の子供につけたい力等を参加者で議論や小グループでのワークをしながら取りまとめた。2年目は初年度の成果を5つに類型化し、それらを達成するために自分たちはどんな取組ができるのかについてワークショップを行った。この会議の成果を踏まえて、飯南町の保・小・中・高一貫教育の系統的なキャリア教育、さらなる連携強化に向けた計画の見直しをボトムアップで練り上げる取組の準備が進められている。さらに、300人規模の会議だけではなく、公民館エリアでより小さい規模の小集会を行っている。有識者が集まってプランをつくるやり方もあるが、町民の声を聞きながらボトムアップで積み上げて、つくり上げるような取組である。

各地域で地域の側がより主体的になり、様々な切り口で地域の子供たちを育てる取組が少しずつできていると思う。

**吉田 S L** 大田市の取組について紹介する。大田市では、本年度は魅力化を2本柱で進めている。

1つ目の柱が、市内の学校、地域への教育の魅力化の啓発。1つが夏ごろに開かれた大田市教育魅力化井戸端会議。仁摩と大田地区で広く地域に呼びかけて、県の教育魅力化と市の魅力化について説明した後、協議した。「TSUNAGUおおだの未来」という、おおだ教育フォーラムも開催した。大田市はここではあえて魅力化という言葉を使わなかった。まだまだ教育現場には魅力化に対して少しアレルギー反応ややらされ感を感じていたり、地域に魅力化と言われても何のことだかわからないという雰囲気があったりしたため。そこで、教育フォーラムという形で開催し、高校生や中高生の地域貢献グループが発表し、その後分かれて協議をする形をとった。大田市が魅力化を知ってもらうためにつくったコマーシャルを見ていただきたい。

〔映像視聴〕

**吉田 S L** 今、コマーシャルの第2弾をつくり、広く地域にも啓発をしている。

2本目の柱が、魅力化の取組を支えるために新たな組織として立ち上げた、「おおだ共

育共創ラボ」。これは大田市の派遣社会教育主事が魅力化を支えていく地域の組織ができないかと始めたもの。放課後の時間に高校生と社会人との対話を定期的に行っており、今年度は6回開催された。大田市の社会人や地域活動をしている社会人グループが来て、高校生と今後の大田市のことについて話し合いを行っている。「おおだ共育共創ラボ」はメンバーをさらにふやし、地域の中心となって魅力化の活動を推し進めていく予定。次年度は、保・幼・小・中・高をつなげ、さらに地域全体を巻き込んで大田市の魅力化を進めていきたいというビジョンで活動している

**後藤社会教育主事** 先月、「県立高校魅力化ビジョン」を策定した。離島や中山間地域の高校が中心となって始めた魅力化の事業を全ての高校で取り組んでいく、そのためにも地域と連携して取り組んでいくことが、策定の方針などに書かれている。

「地域協働スクールの実現」という項目がある。これは、地域と学校が一体となって教育理念を共有し、協働活動を進めていく、協働活動を進める中で、教育活動をより豊かなものにしていこうという理念である。地域協働スクールを実現するための体制を2022年を目途に全ての高校でつくっていく。さらに、地域資源を活用した特色ある教育課程の構築について、全ての高校で地域課題解決型の学習を実施する。

**有馬会長** 以上の説明を受け、この教育の魅力化をめぐっての討論、意見交換に入りたい。ここまでの説明について質問がある方はそれもあわせて発言していただきたい。

**岡本委員** 飯南町で進めていることがすごいと思った。300人の参加者が集まったことについて、その前に公民館単位で進めながら最終的に全体会に導いたという話だったが、公民館単位での進め方について補足してほしい。

**後藤社会教育主事** 正確には、公民館で行ったのが後。先に300人の会を行おうと組織を立ち上げ、関係者が広報・周知して、300人の会がまず始まった。今年行われた2回目の会もおおむね300人ぐらいが集まった。しかし、年1回の会に出られない方の声も拾っていききたいという課題意識で、町の教育委員会が主体となり、もう少し小さい規模で公民館単位の小集会を行っていこうということになり、2回目の300人規模の会の後に、そのような会が立ち上がってきた。

**岡本委員** 300人の参加者は、どこが主導して集めたのか。

**後藤社会教育主事** 教育委員会と地域振興の部局の担当者、高校の先生等からなる部局横断のコアチームが中心となり、学校やPTA、後援会等の組織に働きかけをした。また、社会教育部局は公民館を回り地域の関係団体に声をかけて人を集めた。高校では、生徒に

声をかけ、町がスクールバスを出してサポートするという仕組み。夜に行われたが、熱気のある会だった。

**有馬会長** 飯南町には5つの公民館があり、地域としては23の小地区と呼ばれている地区に分かれている。小さな拠点づくりという観点や、地域づくりという言い方をするときの地域というのは、どちらかというと23の小地区がかなり大きな意味を持っていると思う。隠岐島前高校と同様に、飯南高校でも子供が減少し、このままだと3つある学級が2つに減り、さらに1つになるという高校存続の危機感から、子供が来るためには魅力ある高校にしなければならないということから魅力化の取組がスタートした。飯南町は、県立高校というよりも町立高校のような思いで飯南高校を支え、地域ぐるみ、町ぐみで高校の魅力化に取り組んだ。飯南町では地域と学校が連携しながら、社会や地域に開かれた教育課程やふるさと教育を重ねながら実施しているが、実は地域といっても様々な地域がある。さらに難しいのは、島根県の場合、公民館という言葉さえも地域によって違う。「島根県はこれからも公民館とともに歩んでいきます。」という表現があり、確かに社会教育を考えると、公民館を中心にして地域づくりも社会教育も進めていくことが基本なのだが、この公民館という言葉や組織さえも、地域によって少しずつ違うという状況がある。

したがって、どのようなことを考えていくときにも、地域の仕組みや組織との関連を念頭に置いて地域振興を考えていかなければならない。そういう意味で、岡本委員は飯南町の公民館のことを聞かれたと思う。お互いにある事例を理解する上で、その地域が公民館なのか、コミュニティーセンターなのか、交流センターなのか、それが公民館とどのように違うのかということをもまず理解しておく必要がある。

**岡本委員** 飯南高校の存続や魅力化が一つの起点になって、それをコアにしながら全体の地域づくりを進めたことは、非常に理解できる。

**有馬会長** 教育の魅力化だから、魅力のある教育が行われる地域になっていかなければならない。そのために学校が果たす役割もあると思うし、地域資源を教育資源として生かしていくということも含まれている。教育長メッセージの中にもあった「定まった答えのない課題にも粘り強く向かっていく力」が、教育の魅力化を目指していく中にあるし、学習指導要領の前文にも持続可能な社会のづくり手となることができるような力をつけていくことが述べられている。逆に言うと、困難な課題に立ち向かわないといけないという事態に陥っているときは、危機感から教育の魅力化というテーマも生まれてきたという可能性もある。危機や課題に耐えたり、向かったりできる力をどのようにつけていくかということが

背後にある。

きょうのテーマは「教育の魅力化をどう進めるか」みたいなことだと思うが、教育の魅力化という言葉は、それぞれの地域や職域や立場から見て、少しは聞きなれてきた言葉か、それとも新鮮な言葉か。

**佐田尾委員** 魅力化といえば、高校の魅力化というイメージがとても強い。飯南町では、飯南町の魅力化と言葉をかえられたということで、それ一つでも捉え方が違う。高校の魅力化はやはり距離感があったが、飯南町や大田市の話聞いて、いいことだと思った。それまでは敷居が高い感じを持っていた。

**有馬会長** 高校の魅力化は高校の生き残りをかけた危機感から生まれてきた言葉というように、余り位置づけ過ぎてもいけない。この言葉を小学校にも中学校にも教育界全体にも当てはめて、魅力ある島根県の教育をつくり上げていくと共に、地域づくりにもつながっていく教育を考えるということだと思う。

**賀戸委員** よく先生と話すのだが、子供が勉強しないのは勉強に興味湧かないからなのではないかという話が時々出る。だからこそ、地域の様々な人とかかわりを持つことが重要になっているが、今ごろは社会全体が組織に入らず個人で動こうという傾向が強いので、なかなかこれは難しい問題だなという気がしている。

**有馬会長** これからさらに地域挙げてとか、組織的にとか、連携しながらとかということになってくると難しい。

幼稚園やこども園から見ると、教育の魅力化というのはどのように響くか。

**井上委員** 幼児教育で、0才から就学前までの教育にとっては教育の魅力化というよりは、島根県らしい教育や松江市らしい教育という言葉のほうがよく使われている。少子化の時代なので、幼稚園、保育園は幼い子供の人口が減って、存続が大変危ぶまれている。だから園が地域と結びつくということがどんなに大切かということはずくづく感じている。少ない子供たちの教育をどのようにしていくかという点では、公民館や地域の人、自然や文化というものは本当に大事な教育資源である。

**有馬会長** 幼稚園やこども園も地域に開かれており、地域に支えられ、つながっている。

P T Aでは教育の魅力化について、どのように思っていたか。

**千原委員** 学校から高校魅力化プロジェクトについて聞かされたことがある。自分も地域では一住民であり母親であるので、学校や町村からは様々な情報を目にすることはある。実際に地域の方が具体的に地域の子供たちはこのように育てほしい等、一緒に話し合う

会はあるか。また、どのように運営されているか。

**後藤社会教育主事** 例えば、今、県で進めようとしている地域協働スクールというのは、小学校や中学校でいうコミュニティ・スクールみたいなもの。地域の中で地域の声を拾いながら学校運営に活かしていく仕組みを持っている学校は少しずつふえている。

10数年間、ふるさと教育を続けてきているが、取組が次第に形骸化してきている。例えば6月になったらこのおじいちゃんに来て、田植えを教えてもらって、秋になったら稲刈りをして、わら草履を編んでというのがルーチンになり、毎年同じことが行われていて、それは何のために、子供にどんな力をつけるために行っているのかということが教員も手伝っている地域のおじさんやおばさんもわからなくなっているケースがある。また、手伝っているという意識で地域のおじさんやおばさんたちが学校の中に入ってきている。教育活動の理念を共有していれば、こんな子供に育ててほしいと思って地域のおじさんやおばさんが学校の中に入ってくるからこそ、社会に開かれた教育課程が具現化するのだと思うが、実は今はそうになっていない。学校教育を地域がどのように支えるのか、さらにそれを何のためにやるのか、そのためにはどのような力が要するのかということまでが共有されているかという、それはまだできていないという感想を持っている。

**千原委員** 我が家の子供たちがまだ小学校や中学校に通ってるころは、町でふるさとティーチャーという取組があり、おじいさんやおばあさんが田植えや稲刈りや稲こぎに参加してくれていた。地域の祖父母世代は自分の孫がいる間は、何かしてあげないといけないという思いで協力していたが、親も含めて、子供が小中学校を卒業すると地域の横のつながりが少なくなる。役員をしていると学校や地域でも動くことはあるが、子や孫がいない家庭とのつながりが希薄になっていると感じる。

**山根委員** 安来市でも学校と地域が連携・協働して何とか子供のためにと地域を盛り上げるためにと頑張っている方はたくさんおられる。さっきの発表を聞いて衝撃的だったのが、300人の人が集まって自分たちの地域の子供たちをどうしたいかということ、学校と地域のボランティア、その他かかわる大勢の方で話し、事業をされていること。頑張っている方はたくさんおられるので、いかにそれらの方を本気にさせて一緒に取組ができれば、地域や私の住む安来市を変えられるのではないかと思ったら、何か緊張して涙が出そうになった。私も本気になれる大人をたくさん見つけて一緒に頑張れたらいいなと思った。

**吉本委員** 冒頭に豊田委員が横の連携についておっしゃったが、参考になりそうな取組を

紹介する。浜田市は9つの中学校をブロックに分けて、浜田親子共育プロジェクトを推進している。平成29、30年度に三隅小学校の栄養教諭が中心となり文部科学省の「つながる食育推進事業」を受託し、2年間取組を続けた。三隅小学校では、6年生が月1回、家庭で自分の弁当をつくるという取組を過去数年間続けていた。その栄養教諭は学校給食で魚が出る日に残食率が多いことに気づき、箸の持ち方が未成熟であることに着目し、浜田の魚を好きになってほしいという点に力を入れて取り組んだ。

平成29年度は三隅小学校が推進校で、三隅中学校と岡見小学校が連携推進校という位置づけになった。県の保健体育課や浜田市教育委員会、保健所や浜田市健康推進課、一般企業を含めた協議会がつけられた。課をまたいで組織、推進母体ができたことにより、取組に相乗効果が生まれ、全国に情報発信できる取組にすることができた。

今年の目標は、連携校の取組も充実させるということと、小学校の取組をどのように地域の皆さんに広げるかということだった。そこで保護者にも魚を使っていただく機会をふやせたらいいと考え、公民館が支援し、スーパーや魚屋にもコアチームに入ってもらった。ディスプレイをつくって店に飾ってもらい、四季を通じた魚、浜田市でとれる魚を目に見える形で紹介することにより、地域の皆さんが日常の買い物を通して学校の取組を知ってもらうことにつながった。日々の生活の中で学校の子供たちを応援しているという意識を醸成し、学校と地域がつながっていく姿を目指した。

今年の1月の学校給食週間に、文部科学省の食堂で島根県の取組の成果として郷土料理の焼きさばめしと浜田の赤天等が学校給食メニューとして提供された。そこに至るまでには栄養教諭の熱意があったのだが、地域が学校の取組を応援していくという形ができた。公民館や学校には魅力化という目標やイメージがあると思うが、地域の皆さんはまだまだ知らない。この取組では魅力化という言葉は使っていないが、平成29、30年度で何かできてきたのではないかという例を紹介した。

**有馬会長** 学校が行っている活動が地域と連携することにより地域に波及したよい実践例だと思った。

ここで大事だと思うのは、今までふるさと教育という言葉で位置づけたり、解釈したり目指したりしてきたことを、これからは一応、教育の魅力化というキーワードを共通目標にしてやっていくということ。今までふるさと教育がやってきたことと全く違ったことを目指すわけではない。十分重なっている。ただ説明があったように、ふるさと教育という言葉が長年使ってきたため、少し色あせてきたかもしれない。しかし、決してふるさと教

育が間違っていたから新しい教育の魅力化という言葉にかえたというわけではないと考えたい。

**豊田委員** 途中で魅力化という言葉に対するアレルギーという話が出てきたので、そのことについて思うことを伝え、その後、有馬会長の質問に対して思うことを3つ話したい。

アレルギーに関しては、3つの要素があると思う。1つ目は感情的な側面。高校を魅力化する、魅力的にするということは、「それでは今は魅力がないのか。われわれ教師は十分やっているのではないか。」という面。学校の先生方や学校そのものを肯定的に捉えることが大切。今まで取り組んできたことを肯定的に捉えながらよりよくしていくニュアンスが伝わっていないのではないか。

2つ目は変化に対するおそれ。これから学校は変わっていかなければならない、教育は変わっていかなければならないという、変化に対するおそれがあるのではないか。

3つ目はよくわからないものに対するおそれ。つまり高校関係者は魅力化計画の中で少しずつ取り組んでいく中で、「魅力化とはこういうものなのか。別に塾や寮をつくるのではなく、本当によい教育とは何だろう。我々はどのような子供たちを育てたいのか。どのような人をつくりたいのか、ということ等をみんなで対話していくことが大事だ。」と、対話のプロセスに魅力があることがわかれば怖いことではないことに気づける。今まで取り組んできたことと十分重なっているし、それを包括した話であることをここで伝えておきたい。

続けて、自分自身の思うことを3つ紹介する。

1つ目は魅力化自体が変化してきたということ。隠岐島前高校から始まった魅力化は高校の存続、高校がなくなってしまうと人口減少がさらに加速するという状況で、学校の存続のために始まった。隠岐島前高校の場合は2クラスが安定的に続くようになってきたとき、今度は学校の存続だけでなく地域の存続、地域がいかに持続可能な形になるために教育に何ができるのかを問い直すし、探求し続けるという形に魅力化が変わってきた。地域が存続するとか、地域が持続可能な形になるために教育はどうあるべきかということは、中山間地域や離島に限った話ではなく、都市部でも十分考えていかなければならないことだと思う。魅力化自体が島根県の中でも変わってきている中で、ぜひ委員の皆さんに投げかけたい問いがある。子供が自立することと、地域が自立することの共存がすごく難しい。どういうことかということ、島根県において教育を考えていく上で、子供が社会に出て自立できる人間になるためにどのような力が必要なのかと考えて教育があるべきだと思ってい

るが、一方で、地域では人口減少や高齢化が進む中で、地域が存続するとか、地域が持続可能な形になるために教育にどのようなことができるのかという文脈で話をすると、「それは教育ではなく、人材育成ではないか。」、「教育を子供の成長や自立以外のために行うのはおかしいのではないか。」という意見がある。学校の教育関係者にとっては難しい壁だなどと思う中で、社会教育にそのヒントがあるのではないかと、社会教育関係者がそのジレンマや難しさを解消できるのではないかと思っている。

2つ目は、魅力化を進めていく上で、特に我々が悩んできたことは、いかに魅力化を自分事にしてもらおうかということ。本当はもっと魅力化にかかわるべきではないかという価値に気づいた少数の人だけではなく、学校教育、地域振興、産業振興的な話でもあるので、本当は連携して取り組んでいかなければならない話だと思っているが、なかなか自分事にできない。そのような現状に対して私たちもすごく悩みながら、努力し続けるうちに、昨年度、地域・教育魅力化プラットフォームという団体ができ、まずは島根県内の魅力化を推し進めていこうという流れができた。首長部局の地域振興担当者や学校関係者やコーディネーター等、多様な人たちが一緒になり、本気で取り組もうという話になった。まずは県が本気度を示すために県の方々が集まる研修の中で組織を超えて連携しようという提案があった。社会教育も学校教育も地域振興もふるさと島根定住財団も横串を刺してチームを組織する、と。さらに、各学校や各地域がチームを組織して取り組む際に、県は後方支援ではなく伴走という形で一緒に入って取り組むことになった。そのような経緯を経て、飯南町では県の方と地元のコアチームが3～4ヶ月間一緒になって準備を進めた結果、300人の会が実現できた。どのように自分事にしていくかという観点で、今本当に大事なことは組織を超えてまぜたり、境界線を溶かしたり、開いたりすることだと思う。もっと言うと、余白をつくる、かかわりしろがあるということが大事。どのような人を育てたいかということがかちっと決まることよりも、むしろ途中のプロセスをいかに開いて、大事にしながら対話的に進めていくかが肝。きょう配られた「県立高校魅力化ビジョン」と同じように、隠岐島前高校でも1年半～2年間かけて向こう5年間のビジョンをつくった。その際には徹底的に組織や会議を開いて、島前地区で活動するリーダーだけではなく、子供たちや地域の方や先生方にも入ってもらい、回数を重ねてつくった。このようなことが個人的には大事だなど思う。

社会教育課は積極的にほかの部署の方々と一緒に取り組もうとしているが、それはもっと推し進めていただきたい。徹底的に県の部署の壁を壊していくというか、一緒に考えて

いく等、島根県庁の中で一番推し進める課であってほしいと思う。

3つ目は、特に大事なことだと思うが、学びのあり方が変わるという話。今、教育指導課とも話しながら、学校の先生たちがどのように魅力化や探求的な学びに取り組むかという際に、少しずつかわりたいたいと思っている。様々なところの話を聞いたり、アメリカの探求的な学びを視察したりしてきた中で、今、教育改革が進まない1つの原因は学力観の変化、新しい学力観についていけない、学校の中での変化がまだ起こっていないのではないかと考えている。これは先生方が悪いのではない。このことは社会教育にとってはどうなのだろうということをぜひ委員の皆さんに聞きたい。社会が変化したから求められる力が変化する。だから、学校の中でも学びが変わっていかねばならないという文脈中で、学びの変化を幾つかの要素に分けて考えたい。例えば、学ぶ場所の変化では、学校だけで学ばずに外に出る。かかわる人の変化では、学校の先生だけではなくより多くの人にかかわる。この学び場所の変化とかかわる人の変化というのは、学びの変化に応じて場所やかかわる人が変化する。もう一点、学びのあり方の変化では、先生が知識を持っていて、それを子供たちに教えるという学びのあり方から、子供たちが様々な知識を使って考えたり、実行したりすることが大事だと仮定すると、もっと探求的な学び、つまり子供たちが自分で自分が興味のあるものに対して調べたり、実践したり、実践の中から学んでさらに知識を獲得しようとまた学び出したりというプロセスがすごく大事になる。それをどのように進めていくかと考えると、先生たちのあり方がより伴走者的になると思う。このように学びのあり方が変化していく中で、社会教育でいうところの学びのあり方は変化しなくてよいのかどうか。学力観の変化の裏側には社会で大事にしていかなければならない価値観の変化があると思っている。それはむしろ島根県とは相性がいい部分であり、島根県がこれまで大事にしてきた文化の継承や伝承等が大事だと思う。以上のように、私たちが学びの変化にどのようにかかわったり、対応したりしていくかということが大事だと思う。

**有馬会長** 教育の魅力化をキーワードにして進めていくときに、これまでの考え方、体制等に変化が必要になってくるし、その変化はできるのかという懸念やポイントが大事になるのではないかということについて、3つに分けて話された。その3点の境目は少しわかりにくいところもあったが、要するに、私たちが概念砕きをして立ち向かっていかないといけない部分が3つあると受けとめた。

社会教育課に突きつけられた一つの壁として、社会教育課も知事部局や教育委員会のほ

かの部課等も含めて、連携の壁があるではないか、と。教育の魅力化を進めていくときには連携が必要だが、社会教育課はほかとの連携が一番上手な課のはずだからどうかという質問だが、いかがか。

**前田課長** 豊田委員からの3つの意見についてコメントさせていただく。まず1点目の、子供の自立と地域の共存、併存の難しさ、これに対して社会教育は何ができるのかという、ある意味究極の課題について。体系的な意味を込めて言うと、昔は高校の存続のために高校の魅力化が始まった。しまね留学、しまね学というところから始まって、島前高校や飯南高校等がいわゆる第1期生で脈々と取り組んでいる。浜田高校や大田高校等は昨年度ぐらいから始まったという歴史の違いがある。存続を含めた高校の魅力化をメインテーマに置きながら取り組んでいたところに、平成26年度に、増田前岩手県知事が座長を務めていた「日本創生会議」から、人口減少が顕著になり、2040年には全国の市町村の約半分の存続が難しくなるというセンセーショナルな情報が流れた。国が地方創生というかけ声を始め、それに呼応して島根県が小さな拠点づくりという形で地域を残していこうという動きが始まったのが平成28年度。そのころから、高校の魅力化ではなく教育の魅力化というように、高校だけでなく地域を巻き込み、地域と一体になって取り組んでいこうということが始まって今に至る。高校だけで完結するのではなくて地域、保・幼・小・中・高を巻き込んだ運動論として、教育の魅力化が成り立っているのが今の姿。小さな拠点づくり、あるいは地域を残すために教育を使うことはよろしくないといううがった見方もあるが、ある面これは双方が乗り入れてやっていく、両方にとってプラスになる仕掛けにしなければならないと思っている。そういう意味では、飯南町の事例は、高校の魅力化を脈々と続けてきた流れが教育の魅力化という広い概念になったこと、さらに小さな拠点づくりとしても地域を存続させたいという意識、これらを一段階レベルアップしよう、グレードアップしよう、本気で取り組もうとビッグバン的に起こしたのが300人会議であり、これは教育委員会だけではなく首長部局も巻き込んで行ったことが大きな良い例。部局を超えて巻き込むやり方で行ったという、まさに一つの社会教育的な流儀としてのサンプル。異質なものと併存の難しいものを橋渡しする、コーディネートする、プロデュースする、勇気を持って向かうというのも社会教育の強みであり、やらなければならない私たちのミッションだと思っている。

また、ふるさと教育の話の中で出た、手伝うという感覚になってしまって、本来のものがわかりにくくなっているのではないかという点。「もっとこのような意味で、この目的た

めにこのような子供を育てるためにやってください。」というメッセージ力が弱かったのは私どもの責任。社会情勢的には教員定数が増えないことに加え、いじめや不登校や発達障害、あるいは英語や道徳が教科化される等の状況により学校が多忙になり過ぎているため、教科教育にもプラスになるようにもっと腰を据えてふるさと教育を行いたいけれどもできないという部分もあると思う。そういう意味では今回、教育の魅力化という、高校だけではなく中学校も小学校も、あるいは地域のおじさん、おばさんも含めたものが地域のムーブメントになれば、ふるさと教育の本来の趣旨について、もう一度目を覚まさせる機会にもなるし、特に社会教育関係者というのはそこをしっかりと語って、つなげていく必要があると思っている。その上で、共存の難しいものを社会教育がコーディネートすることについてはマクロ的なプロデュースにおいても全く必要な事柄だと思っている。

2点目の同じ所属の中での壁を壊すということについては、壊すばかりではなく、足りないところを補い合ったり、強みを生かし合ったりしながらうまく橋渡しをすることが真に大人力のある公務員や社会人としての役割だと思う。壊すというあつれきの意味合いではなく、従来は連携していなかったところにも仲間になってもらう意識で取り組んでいかなければならない。

3点目の学びの変化に代表される社会教育ということについては、1点目と重なるが、ふるさと教育が形骸化してはよくないので、新しい学力観に従来の社会教育的な流儀、あるいは本来ふるさと教育が持つ使命を再認識できるよう努めたい。ふるさとの財産を教えるだけではなく、子供たちの好奇心をくすぐったり、学ぶ意欲をかき立てたり、他者と協働したりする等、教科教育では難しいがふるさと教育の場を使えばできる、あるいは学校の先生ではなく地域の講師を活用することが学びの触媒になり得るといいサンプルがふるさと教育にはある。ここは社会教育の大きなミッションだと思っている。

**有馬会長** 今、課長から話があったが、私たちも社会教育委員として教育の魅力化に向かって提案や意見を残したいが、いかがか。

**岡本委員** 浜田市は今、公民館を新しいイメージにしようという動きがある。市長部局はコミセン化と言っているが、私は公民館は社会教育の場であるので、絶対に公民館を死守しようとしている。学校教育との連携という点で公民館の役割としてそれに応じたという例を紹介する。

私の地域に児童数140人未満ぐらいの雲城小学校という学校がある。6年生が2学期の始めごろ、卒業するまでに思い出づくりでなく何か役立つことをしたい、地域に役立つ

ことをしたい、ということをお話し合った。ある日、先生から子供が話に相談に行くので聞いてほしいと電話があった。6年生が2人来て、地域の人と一緒に学校周辺の登校路のごみ拾いをしたいので協力してほしい、と。さらに話を聞くと、グループのメンバー構成やルート、準備物などもしっかり計画されていた。当日、地域の大人は子供たちとほぼ同じ30人近く集まった。子供たちがリードし、大人は子供の後ろにつき、子供の指示に従って会話をしながら楽しくゴミ拾いをした。後から大人の話をお聞くと、「館長、あれはすごい試みだ。子供や学校に対する考え方が変わった。道々ゴミ拾いをしながらいろいろ話し合うことができたが、6年生がすごくしっかりしている。」という感想があった。これが開かれた学校だということ実感した。

もう一つ私が最近心に残っている社会教育に関する話をしたい。それは「ながら見守り」ということ。昨年5月ごろ、新潟県で下校時に子供が殺された事件があった。それに反応して国のほうから様々な指示が来た中に「ながら見守り」というのが提案されていた。子供が帰る時間に散歩に行ったり、ウォーキングをしたり、買い物に行ったり、犬の散歩をしたり、あらゆることをその時間に合わせて子供を見守ることを今提案している。これをしっかりと広げ、一つのきっかけとして社会教育、要するに地域の人々の認識や考え方を「地域の子供は地域みんなで見守っていこう」というように変えたいと思っている。要らない世話ではなく、必要な世話をやくというぐらいの遠くから温かく見守るイメージ。子供たちが見守ってくれる地域の大人を見ると、自分は大切にされているという気持ちになると思う。子供たちがそういう気持ちになると、心が安定し学校での学びの心も育つだろうし、様々なことにより影響を及ぼすのではないかと、この間の学校評議員会でも伝えた。地域の力を育てるのが社会教育だと思っており、「ながら見守り」を最近の社会教育のテーマにしているということをお報告したい。

**佐田尾委員** ふるさと教育について学校の立場で言わせていただく。確かに今のふるさと教育はマンネリ化していると感じている。県から学びの系統性として、出会う、気づく、考える、生かすという4つの段階を提示されているが、今は出会う、気づくのところまでストップしている感がある。

しかし、雲城地区の例と同様に、渡津小学校でもふるさと教育で学んだことから自分たちでできることを考え、それを地域にどう生かせるかということをお実践しようと考え、少しずつだが取り組んだ。6年生の国語でコミュニティ・デザインを考える教材がある。地域の公民館や地場産センター等の施設をもっと地域の人に使ってもらうにはどうしたらよ

いかということを考え、様々な情報を集め、考え、提案するという実践だった。地域の自治会長や江津市の社会教育課、地域振興課の方にも来ていただいて、子供たちがプレゼンテーションを行った。渡津小学校ではこのような実践は初めて行った。子供たちがこんなにも真剣に地域のことを考えてくれているのかと、地域の方は大変感激されていた。学校としてこのような活動を今後も取り入れていきたい。また、職員のふるさと教育に対する意識を変えていかないといけないし、地域から与えられるばかりではなく、学校から積極的に発信していきたい。

この間、学校の評価委員会があり、渡津地区外の出身の保護者代表から、「私は子供や学校を通して地域を知ることができる。」という発言があった。学校の役目はこれからの地域づくりにはとても大事なものと改めて思った。また、教育長メッセージの「よりよい学校教育を通してよりよい地域社会をつくる、よりよい地域社会がよりよい学校教育をつくる」というキーワードが私はとても好きで、職員にずっと言い続けてきた。社会教育で私自身が学ばせてもらったことをこれからは一地域住民として生かしていきたい。

**賀戸委員** 浜田市弥栄町には中学校17名、小学校40数名の小さい学校があり、私も評議員として両校に10数回伺う。そうすると、次第に先生や子供たちとも顔見知りになり、先生も本音を言ってくれるようになる。こちらから出向いていくと子供たちにも覚えてもらえるし、行事のとき等にこにこと手を振ってくれるようになる。小さいところは小さいところなりに、地域の側から出向くことも必要だと思う。

**千原委員** 昨年度からこの会議に出席し、学ぶことや地元へ情報提供できることが多くあった。自分が学んだことを地元へ持ち帰り、学校のPTAの会で少しでも話をしたり、問題提起をしたりしたいと思った。この2年間の経験を生かし、地域の一員として、また親として少しでも力になればと思う。

**山根委員** 千原委員と一緒に、素晴らしい委員の皆さんから学ぶことが大変多かった。教えていただいたこと、気づかせていただいたことを地元へ帰り、目覚めさせるためにもよい意味で“暴れないといけない”と思っている。

小さい子供を育てているお母さんは精いっぱい状態なので、声をかけたらよいかと悩む。しかし、話をしてみると、思いのあるお母さんたちがいることに気づいた。まずはそういうお母さんたちを大事にし、一緒に地域を変える一員になれるようにつき合っていけたら、何年か後に花開くことができるのではないかというイメージを持っている。

**有馬会長** PTAは狭い意味での学校の親の会という思いだけではなく、やはり地域の中

でもどのように役割を果たすべきかということにもかかわってけるとよいと思う。全ての組織がほかとの連携やつながりとかを意識しなければ、地域における地域づくりも地域の魅力化も開けてこないのだから、山根委員の話は根本的に大事なことだと思う。

**井上委員** 園長として公民館の運営協議会の一員を務めている。その会の委員は非常に若い。小学校や中学校の保護者世代の方が集まり、様々なことを取り決めている。この会ではみんなが積極的に話すし何かを行う際の動きがとても速く、参加者を巻き込む力もある。

私がいる出雲郷地区では、今年行われるホーランエンヤにかかわっている。その前にホーランエンヤの事前学習会を行おうということになり、その会で多くの地域住民に集まってもらえるための計画を立てたり、ポスターを作って掲示したりした。当日は私が勤める園の親子も10組以上参加したので驚いた。ホーランエンヤは小さい子供は見たこともないし、聞いたこともない。にもかかわらず多くの人が集まったということは、保護者が期待したり、興味を持ったりしていることが、子供たちの興味や関心を生んだのではないかと思う。若い人には引きつける力がある。この保護者のように若い人が興味を持ち、参加してみようかという気持ちをもつと、気持ちが動いて体も動くということを感じた。一昨年のPTA会長と昨年のPTA会長も運営協議委員になった。地域活動に参加することは地域を知ることにつながり、そこでまた公民館活動に魅力を感じて、参加することにより、その方々の活力を結集して地域を動かしていく力になっていくということを感じた。

**吉本委員** 2月11日の公民館の島根県公民館研究集会で、私が勤務する白砂公民館の佐々木主事が発表した。分科会に参加したある教師から「私たちは学校で子供たちにこんな子供になってほしいなと思って授業を行っている。でも、地域の方がこのような思いをもって子供たちを社会で見てくださっているのが分科会に来て初めてわかった。公民館の大切さに気づくことができた。」というコメントがあり、大変喜んだ。

別件だが、公民館の全国調査が行われており、その中に公民館という名称がコミュニティーセンター等様々な名称に変わったり、公民館所管が教育委員会から首長部局になったりする例が挙げられていた。その判断は各自治体のに委ねるという表記があった。私個人としては公民館からコミュニティーセンターに移行していくと、様々なことが統一した物差しでできにくくなったり、やりにくさが出たりするのかなと思う。しかし、逆にそのような壁を取り払い、つながっていくのかもしれないと思うと、実際に社会教育を推進する私たちも迷っている。社会教育の指針や何を目指していくのかということが見えにくくなる時代が来るのかもしれない。だからこそ社会教育の先生方や市町村の派遣社会教育主事

の存在がとても大きい。公民館で社会教育を推進してる現場の職員にとって、社会教育の先生方や社会教育主事にこれからも指導や支援をお願いしたい。

**有馬会長** 教育の魅力化を今後どのように進めていくべきかということに関して、私たち社会教育委員の意見を伝えることによって、今後の社会教育行政に活かしていただくという基本的な趣旨できょうの会は開かれたが、大変難題であった。簡単に結論が出る問題でもないし、私たちも初めて取り組んだテーマだったので、今後も勉強を重ね、さらに建設的な意見が言えるようにしたい。

難しいというのは社会教育そのものも大変難しい上に、教育の魅力化を考えていくにあたり、学校教育と社会教育を重ねて、統合して考えなくてはいけないという点であった。今後教育の魅力化や地域づくり等、非常に重要なテーマが入ってきているだけに、総合的な視点が私たち社会教育委員に必要なようになってくると思う。

文部科学省も地域と学校の協働というキーワードを用いている。地域と学校がどのように連携、協働していくか。このことは教育の魅力化を進めていくときに最も大きな観点であり、方法論的にも大事な面を持っていると思う。地域と学校の協働は様々な要素を含んでおり、目標やビジョンの持ち方に関しても非常に総合的なものを要求される。目標やビジョン、活動や内容に関する方法やステップということについても様々な視点から検討しなければならない。そういう意味でこの教育の魅力化は、非常に広くて重い課題だと思うが、逆に言うと非常に重要なキーワードを突きつけられているとも思う。

もう一つ考えていかなければならないことは、私たち社会教育委員、社会教育委員の会でもある。私たちは県へ様々な提言を行うのだが、社会教育委員は一人一人が独立しており、地域に帰れば地域で役割を果たすという一面がある。社会教育委員は教育の魅力化に向かってどのような役割を果たさなければならないのかという点も考えていかなければならない。社会教育委員の役割という点でいうと、地域と学校の協働をどう実現するかというあたりに、社会教育委員が積極的にコーディネートしたり、かかわりを持ったりする等の役割を持つことが大事になってくる。

**前田課長** 高校の魅力化が始まった当初は県立高校と市町村との間に大きな溝があった。まだ本土側では両者が溝を乗り越えれないところもあるようだ。しかし、海士町と隠岐島前高校でやり遂げた成功例を知っているのだから、本土のどの地域でもできると信じている。ただ、魅力化の取組を始めて10年になる地域と、まだ話し合いもままならない地域もあるように、温度差というよりも速度が大きく違う。教育の魅力化は全県で少しずつ常に動

いている。したがって、次回以降も折を見て教育の魅力化に社会教育として何ができるのかというマクロ的な視点、あるいはそれぞれの立場、地域、職域でどのようなものができるかという視点からの意見もいただきたい。黎明期だからこそ社会教育や社会教育主事が橋渡しをして汗をかかないといけない要素もあるし、逆に、軌道に乗ったら社会教育は何もしなくてもよいのかということそうではない。さらに時代のニーズに合った橋渡しや社会教育的にプロデュースしていくことも求められていくので、ある面永遠のテーマかなとも思う。子供たちを育てるためには、赤ちゃんのときからかかわらなければならない。あるいは子供の親への教育ということもよく話題にされる。そういう意味では、前回の会でも取り上げた家庭教育支援も非常に大きなテーマであり、さらに、公民館で大人に対してどういう学びを提供し、大人力をつけさせるのかということも、循環の中の一連の流れなのかなと思う。

今年度はこれが最後の会議だが、次年度以降もぜひとも御尽力、御協力いただきたい。きょうも数多くの意見をいただき、大人力のある社会教育委員に囲まれて本当に幸せな会議だった。

吉田 S L 以上で平成 30 年度第 2 回島根県社会教育委員の会議を終了する。